

## 偉大なり、岩手の音楽山脈

敗戦後の混乱のまだ続く昭和二十三年四月、岩手中学校に一人の若い音楽教師が着任した。生内義夫先生その人である。それから昭和二十九年までの六年有半にわたり在職する。また国語教師の水原一先生は二十三年四月から二十四年四月までの在職なので、丁度一年間は机を並べていたことになる。

この両先生が交声曲三部【岩手山・北上川・三陸海岸】を始めとして多くの楽曲を作られていたことを知る人は今や稀であろう。男子校として創立した岩中は昭和二十年代まではラグビー、体操水泳などのいわゆる「武」の領域が優位であったといえる。しかし圧倒的に物不足の時代にあつて「文」の部門（音楽、演劇、新聞など）での萌芽があることを見逃してはならない。

これをほぼ五十年後の平成十四年頃から生内・水原両先生の音楽業績の掘り起こし調査に取り組んだのは新五回生の畑谷守良氏（平成三十年九月十五日逝去）である。氏による結果報告は石桜同窓会会報二十八号と二十九号に掲載されているので、ここではその中の一部を抜粋ダイジェストして紹介したい。

「昭和二十八年秋、岩手県公会堂で生内義夫先生作曲による交声曲『岩手山』等の演奏会が行われた当時高三の音楽部員であつた佐川隆二氏（新六回）はオーブリール式のテープレコーダーで録音したのだが、氏はそのテープをまだ保管しているという。さらに三作曲のうち一つ『北上川』も合唱練習時に録音済であつたことから、テープ二本を確保出来たのである。このテープを日夜聴くうちに、歌詞や楽譜を記録として残すべきと考えました。

先ずは採譜からということで、知人の音大出の谷川美智子氏（さいたま市在住）に依頼。後日楽譜とエレクトーン演奏テープが届けられた。一方歌詞は佐川氏によつて八方探索が進められる中、母校の第四応援歌の作詞者である吉田榮一氏（新七回）の協力調査や水原先生とのコンタクトによつて発表会のプログラムを入手。これにより【岩手山】と【北上川】二曲の歌詞と楽譜が揃つた。後略」（以上は石桜同窓会報第二十八号収載「生内義夫先生の作品の復元について」より一部抜粋）

「二十八号に報告掲載されたことから、各方面の方々から新たな資料や情報が次々寄せられた。その資料の一つひとつからは、敗戦後の物資の乏しい時代によくぞと思われるほどの文化の香り豊かなものが感じとられ、半世紀の時空を超えながら、生内先生をはじめとする当時の青春群像の情熱が今に伝わることの感動を覚える。

井藤博氏（新二回生）からは【岩手山】【北上川】【岩手青年の歌】【ふるさとの】などの提供があり、永沢和久氏（新四回）からは【北上川】【三陸海岸】【平和】そして小品【おぼろ夜の】の楽譜を、山口晶子氏（盛岡高卒）からは第一回生内義夫作品発表会（昭和二十四年十二月二十八日・県公会堂）のプログラムと参加者の集合写真を頂く。

ある日偶然出逢った一本の古いテープから、このように大きな波紋が広がり、多くの人々縁の系がつながるとは、当初予想だにできなかった。あらためて生内先生と水原先生、そして岩手フィルハーモニックソサイエティを支えた方々の功績を想います。

収集された楽譜を基にPCによるCDR収録をされた佐川隆二氏に厚く感謝申し上げますと共に、このプロジェクトにご協力頂いた皆様に感謝御礼申し上げます。

(以上は石桜同窓会報 第二十九号収載「一本の古いテープから」より一部抜粋)

※生内先生の作品約十点はCDR化して楽譜と共に母校に寄贈保存しております

足掛け2年にわたる畑谷守良氏の熱心で精力的な調査と検証により多くの新しい発見と掘り起こしが実現したことは驚異的でまことに喜ばしいことである。氏の熱意に共鳴して当時の関係者から数々のエピソードが寄せられたことも特筆される。さらに吉田榮一氏(新七回)は「音楽の神髄を伝えた教師と生徒たちの軌跡」と題する次の投稿を石桜同窓会報第二十八号に寄せている

昭和二十四年生内先生の主導で岩手フィルハーモニックソサイエティ結成。岩手高、岩手女子高合同合唱団

昭和二十四年岩手フィルハーモニックソサイエティ主催「第一回生内義夫作品発表会」

昭和二十五年二月七日交声曲三部作『岩手山』『北上川』『三陸海岸』 生内義夫指揮、三神昭子伴奏、手フィルハーモニックソサイエティ出演によりNHKで放送。

昭和二十六年十一月四日 岩中・岩高創立二十五周年記念祝典カンタータ発表 生内義夫指揮  
岩手高校グリークラブ男性合唱

昭和二十七年一月二十日 岩手フィルハーモニックソサイエティ主催「第二回生内義夫作品発表会」  
(県公会堂)

昭和二十八年十一月九日 岩手フィルハーモニックソサイエティ主催 国立音楽大学室内楽団演奏会  
(県公会堂)

戦後の物資不足、食糧難時代の地方都市にあつて、しかも教育制度の改革などのハンディキャップを負いながら、このような格調高い音楽活動をリードされた生内義夫先生と水原一先生の功績は偉大で、またこれを支えた若人達の情熱も尊い。

今あらためて、古里岩手の山脈のような人々の縁に感謝と敬意の念を覚えるばかりである。